

◇ 国 語

国 4-1～国 4-15 まで 15 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

われわれが芸術とか表現というものを考えるとき、まず初めに個人芸術という分野をそのモデルとして思いうかべる傾向があるように思います。歴史的に見ればまったく逆であるにもかかわらず、芸術行為とは集団の表現として存在したのではなく、個人の行為に所属して発展してきたかのような印象をもっていると思います。

絵画にしても音楽にしても文学にしても、個人作業としての純粋度が高いかどうかで、その表現の評価が決まるという感じがあります。ですから、人によつては演劇というものは多数でひとつの作品をつくるものであるから、不純で **ア** なもので、芸術表現としては質が低いという人もいます。たしかに、芸術の目的は個人の内面⇨精神活動の表現であるだけ考えれば、集団作業を本質とする演劇は、個人の内面の純粋な発露が他人との **イ** な関係によつて歪められたり、あるいは偶然的な要素や無意識のものが作用して、各個人の意図をあいまいにしてしまうところがあるといえます。そのように芸術の表現を個人の内面というものと結びつけて考えれば、演劇はむしろ個人芸術を否定するといつてもいいぐらいです。しかしその前に、芸術の存在理由とは何であるかということを考えてみたいと思います。

私は芸術の存在理由を、一般に考えられているように個人の内面の表現のためにあるより、人間理解あるいは人間関係の創造のためにあると思っています。われわれが何かを表現し、それを公にする場合、他者あるいは第三者というものを前提としない活動の持続も、専門的な行為の成立もないからです。

ではこの人間関係の創造とは、何であるのか。それはある人間がどういう関係や状況に置かれているのか、どういう可能性をもっているのか、あるいはどういう感受性をもっているのかをまず明らかにすることです。そしてそこからさらに発展して、いったいこの人間といわれるものは何なのか、そういうレベルでの問いかけを多くの人々と共有することです。つまり、ある表現行為をケイギ^キにして他人と共に人間について考え、想像することです。そういう目的で芸術行為の存在は貴重だと私は考えています。

a

ベートーヴェンの音楽を聴いて、われわれは人間を想像し、人間を理解しようとすることができます。これは絵画にも同様に言えます。しかし、人によっては「音楽とは音ではないか」「絵画とは色ではないか」「演劇のように生身の人間が出てこない」という人がいるかもしれません。そして「なぜそれが人間について想像させるのか」と疑問をもつ人もいます。う。

私が言いたいことは、それが創られた音であり色であるということです。われわれが日常では感じられない音であり色なので、にもかかわらず、というよりそれだからこそと言うべきでしょうが、われわれは思わずそれに注意を集中させられてしまうことがあります。これはいったい何なのかと。また、そうした音や色を創りだすために自分自身の全エネルギーを捧げる人間とはいったい何なのかと。

音楽でも絵画でも文学でも、さらには演劇でも、すべて人間が創りだしたものです。そうした人間が創造したものを通して、われわれは日常で慣れ親しんだ考え方や見方とはちがったように人間を想像し、またそのことによって人間関係について考えることがあるのです。

ですから、人間理解というのは、人間を賛美したり、現在ある人間を肯定することだけを意味しません。むしろ人間とは自然の一部ではないかとか、いまの人間の存在の仕方はよくないのではないかとか、現在の状態を ウ にみる人間理解もあるわけです。あるいは人間とはこういうものだというような、われわれが自明のものと考えてきた人間というものの概念や感受性を変更したり、修正することを迫られる場合もあるでしょう。

芸術がある個人の内面の表現であるとか、個人の内面の叫びであるとか、そういった近代芸術観というものはヨーロッパから発生してきたものですが、われわれが教育された芸術への接し方も、そうした近代芸術観の影響を強く受けたものです。もちろん、私はそうした考え方を否定するつもりはありません。たとえそれが仮説だとしても、個人にはそれぞれに独自の内面が在るという人間への見方を通して、人間をとらえることは、現代の日本にもすっかりと定着していますし、コミュニケーションを成立させる場合にたいへん便利であることは事実なのです。しかし芸術表現を考える場合、これとはちよつと異なる視点から、も

のごを発想していかなければいけないのではないのでしょうか。われわれ人間には、内面という言葉が与える印象ほどには自立し完結した独自の世界などはないのではないかと。

b、ある表現行為なり作品を自分以外の人間にわざわざ示すということは、すでに他人との関係を前提として、その上に成立した行為だと見なさなければいけないからです。それが金銭を目的にした行為であろうとムシヨウ^Bのそれであろうと同じです。個人の内面の表現のようにして発表された作品も、じつは他人に見せることによって初めて内面の表現と呼ばれうるにすぎないということではないでしょうか。

ひとつの例として日記というものがあります。他人に見せたくない個人の内面をトロ^oするのが日記であるという考え方はいささか単純です。少なくとも歴史的に見ますと、日記はひとつの表現形式として **エ** な存在を確立しています。一人の芸術家が作品のほかに日記を書き残したとすると、作品と日記の違いは、作家の他人との関係のレベルの違いを意識した結果にすぎません。内容が違うのではなく、表現形式の違い、そこで作家が意識した関係のレベルが違うのです。そしてもちろん、コミュニケーションを可能とする言葉が存在するということは、そこに集団が存在するということを意味しますから、言葉で日記を書く以上、その人の表現行為も集団のルールに深くキテイ^pされていて、その人間のものとだけは言いきれないでしょう。

言葉の世界だけにかぎらず、どのような表現形式であろうと、他人との関係を前提としていえると言えます。内面の表現のように見えても、それは他人とは関係のない自立した人間の内部というものがあって、何かを表現しているということではないのです。表現とは他人との関係を前提とした約束事の上に成立する行為です。つまり表現のルールは個人に先だって存在しているということです。個人に所属しているかのように見える新しい表現の形式が生まれたとしても、このすでにあるルールへの関わり方が新しいのです。これは自己表現ではあっても、けっして純粋な内面の表現などというべき性質のものではありません。

皆に共有されたルールにそって表現するのがイヤだとか、もつと自分自身の感受性であると信じられるようなもの言いをしたとか、そうした動機で表現されたものであって、個人の内面の表現とだけ言うのは不正確です。これはルールを変更したい、あるいはルールを認めたくないという前提があつて出てきた行為なのです。その結果、たとえばその人間がひとつの共同体のな

かで孤独になったとしても、彼の表現とは、純粋な内面の表現ではなくルールにイギ^F申し立てをしている関係のとり方の表現と見なすべきでしょう。

□ c、いままで多くの人々に励ましを与えてきた価値ある芸術作品は、多様な人間関係や社会を成り立たせている（コミュニケーション・システム）がわれわれに与える感受性や考え方を変更しうる力をもっています。そのためにわれわれは芸術家という人間の存在に、われわれの想像力を誘われたのであり、人間というものがそれに所属しないでは生きていけないような社会の在り方について考えさせられたのです。

本当に優れた芸術は、関係の多様さを背負っています。関係性をいちばん背負った芸術ほど人間の社会やその歴史性を深く感じさせるものではありません。たとえば急に子供が舞台に出てきて面白い演技をしたり、白いキャンバスに筆を走らせたなら抽象的な面白い構図が出来上がるということはあると思います。しかし、これは自覚的、□ オなものだとは言えません。その瞬間は楽しいかもしれませんが、絵画なら絵画の歴史性、演劇なら演劇の歴史性の範疇^{はんちゆう}から見ると、新鮮ではありませんが、やはり無意識的かつ無邪気な行為なわけです。いままで人間が創りつづけてきたというか、集積しつづけてきたその作業の歴史性を免れた、あるいは意識していない行為なわけです。ですから、人間関係を自覚的に変更したり新しく創っていかうという行為にはなりません。

（鈴木忠志『演劇とは何か』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ケイキ

- ① 海外進出をキトする
- ② 壊滅的キキに直面する
- ③ キジヨウの空論
- ④ 新進キエイの作家
- ⑤ 人生のキロに立つ

1

B ムシヨウ

- ① 組合側の要求をシヨウダクする
- ② 論文の要点をシヨウロクする
- ③ オリンピックをシヨウチする
- ④ 出来栄えをシヨウサンする
- ⑤ 損害をベンシヨウする

2

C トロ

- ① トトウを組む
- ② 発展のトジヨウ
- ③ 外国からトライする
- ④ 外壁をトソウする
- ⑤ 結核でトケツする

3

D キテイ

- ① 受付でキチヨウする
- ② 朝早くにキシヨウする
- ③ 成功をキガンする
- ④ 計画をキドウに乗せる
- ⑤ 決められたキシソクを守る

4

E イギ

- ① ベンギを図る
- ② 証拠をギゾウする
- ③ 戦争のギセイになる
- ④ 発言にギネンを抱く
- ⑤ ルール違反にコウギする

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①普遍的 ②個性的 ③妥協的 ④人間的 ⑤一方的 6

イ ①多面的 ②表面的 ③反面的 ④内面的 ⑤一面的 7

ウ ①肯定的 ②一般的 ③形式的 ④批判的 ⑤印象的 8

エ ①発展的 ②日常的 ③個人的 ④社会的 ⑤必然的 9

オ ①具体的 ②感覺的 ③意識的 ④固定的 ⑤天才的 10

問三 空欄 a・b・c に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。

a ①あるいは ②たとえば ③ときには ④いつかは ⑤ともかく 11

b ①もしくは ②すなわち ③なぜなら ④加えて ⑤ですから 12

c ①たしかに ②けれども ③ともかく ④そこでは ⑤それでも 13

問四 筆者は「芸術」をどのように位置づけているか。誤っているものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

14

15

- ① 他者に見せることによつて成立する作者の内面の表現であるもの
- ② 個人の内面の表現であり、叫びであり、他人とは無関係なもの
- ③ 創られた色や音であり、日常では感じることでできないもの
- ④ 他者の影響を全く受けず、自立し、完結した独自の世界を持つもの
- ⑤ 人間理解あるいは人間関係の創造のために存在理由があるもの
- ⑥ 社会の中で個人が持っている感受性や考え方を変更する力をもつもの

問五 筆者は「演劇」の特性をどのように捉えているか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

16

- ① 多人数で一つの作品を作るものであり、独自性がなく、芸術表現としては質が低い。
- ② 計画的に創り上げられた作品より、即興的で無意識に表現された演技の方が面白い。
- ③ 日常で慣れ親しんだ考え方や見方とは違う視野を持ち、人間を想像し、人間関係について考えさせることができる。
- ④ 自立し、完結した独自の世界観を観客に植え付けて、作者の狙い通りの感想に導く。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

現代のありとあらゆる音楽は、すべて大衆音楽である。ポップス、歌謡曲、演歌、ロック、レゲエ、リズム&ブルースなど、多彩なジャンルに分類される音楽に加えて、芸術音楽としてベツカク扱↑いされているクラシックも、立派な大衆音楽だ。

クラシックが大衆音楽？ と疑問を抱く向きもあるかもしれないが、文明化された現代社会では、好きな音楽を好きなきに誰もが聴ける。これは大衆社会が実現したからこそだ。もし、一〇億ドル以上の資産家でなければ聴けない音楽があるとすれば、それは大衆音楽ではない。ここまでありとあらゆる音楽が人々のものになった時代は、人類史には存在しなかった。これは、ある意味で素晴らしいことだ。が、それと同時にオソロしいことでもある。

(二) 大衆社会↑とは、音楽そのものをも破壊せずにはおかない衝動を持った社会だからだ。個人としては善良なのに、大衆という仮面を被るとトタン↑に破壊的になる傾向は、誰もがうつすらと感じているはずだ。インターネット上での個人への完膚なきまでの攻撃など、例はいくらでもある。「大衆は、自己の生命の根源を破壊する傾向をつねに示すものだ」と、スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットが、いまから八〇年以上もまえにすでに指摘していたように、大衆はオソロしい。できれば、このまま素通りしてしまいたいところだが、そうもいかないで、ざつと遠巻き↑に眺めておきたい。

まず、大衆社会（マス・ソサエティ *mass society*）とは何か。ひとつの定義としては、高度に発達した都市機能と、大量生産、大量消費を基盤とした社会で、大衆が身分制度によつてではなく、マスメディアによつてつながっている社会のこと。マスメディアとは、新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどであり、現代では、インターネットという新しいメディアが加わったが、マスメディアが現代人にとって ア を持つのは、この「身分によつてではなくメディアによつてつながっている」という状態だ。

現代のような巨大なマスメディア産業が誕生したのは、二〇世紀のことだが、「メディア（媒体）」が「マス（集団）」になるために欠かせないのが、「大衆」の存在である。マスメディアの生みの親は、それが対象とする大衆であり、大衆が公権力を手にして社会的勢力の中枢に躍りでたのも、二〇世紀になってからのことだ。

社会の圧倒的多数である大衆が、マスメディアによってつながった社会に生きるべくたちにとって、クラシック音楽は芸術音楽で、ポピュラーは娯楽音楽などという分類は、さして意味がない。というよりも、芸術も娯楽も、そもそも人と人が直接つながるためのコミュニケーションのことだ。元来、人と人とのつながりのあいだに生まれていたはずのコミュニケーションの部分に、マスメディアが割り込んできて、大衆をつくりあげていることの意味を、ぼくたちはもつと問わなければならないのだ。

音楽にとって、革命的といえるメディアが、録音メディアの発明である。これが、音楽という概念のすべてを変えてしまった、といってもいい。もともとは、リアルなコミュニケーションの道具だったはずの音が、記録され、再生されるというバーチャルな道具になった。これを、イ 何といおうか！ と、まずは、いつておく。

一八八七年。ひとつの発明品が、フランス革命からおよそ一世紀を経たアメリカ合衆国で誕生する。ドイツ生まれのアメリカ人ギシ、エミール・ベルリナーによる平円盤レコードと、レコードプレーヤーの原型である円盤式蓄音機「グラモフォン」の発明である。

レコードの誕生によって、音楽は、はじめてレコードという目に見えるかたちを持つものになる。音による創作物に過ぎなかった音楽が、レコードという物体を手に入れた。それに加えて、レコードが音楽にとって革命的だったのは、それがたんに音を記録するためのメディアであるだけでなく、音楽体験そのものを劇的に変えてしまったことだ。

それまで、演奏者と聴き手が同じ空間を共有することを意味した音楽体験は、演奏者と聴き手を媒介するレコードというメディアによって、時間的・空間的に切り離され、音楽がはじめて演奏者の介在なしに聴き手のまえに現れることになる。

時間的・空間的に切り離された音楽をごく簡単にいえば、奏者が演奏した空間と、それを聴く空間がつながっていないということだ。CD、iPod など、予めデータとして記録された音楽を聴くことになれてしまった現代では、つい、記録されたもの、楽譜に書き留められたものが音楽であるという錯覚に陥りがちだ。だが、記録されたものは、楽譜にせよ、CDにせよ、あくまで「メディア」に過ぎない。

本来、楽譜などに記録されてきたのは、教会音楽にしても、近代芸術音楽にしても、むしろ特別な意図によって書き残された、

例外的な音楽とみるべきだ。古代から音楽を書き残すことは、ほとんど意識されなかったどころか、むしろ否定さえされてきたことは、文献を少しでも漁^{あさ}ってみれば、いくらでも出てくる。空気の波として生まれ、消えていくのが音の宿命だ。そこから見れば「記録された音」は、ごくトクシユ^{トクシユ}な存在と捉えるべきだ。

人類の誕生からここまで、記録として残された音楽が、ヒトの営みのなかで繰り広げられてきた音楽という行為全体の、はたしてどれほどの割合を占めるのかを想像してみれば、おそらく、0.00000……と、ゼロが限りなく積み重ねられたあとにようやく現れるほどの割合に過ぎないはずだ。

たとえば、バッハ、ベートーヴェン、ショパン、リストなど、大作曲家といわれるなかでも楽器演奏の大家でもあった彼らは、作曲家であると同時に、即興演奏の達人でもあった。その演奏を実際に聴いた同時代人たちの証言を読むと、背筋が凍るとか、音楽が生命感に躍動しているとか、あまりの感動に気を失ったとか、とにかく凄まじい。それを聴いた人々にとっては、これこそが生命を持った音楽そのものであり、楽譜に書き留められたものは、その残骸^{ざんがい}に過ぎないように感じられたかもしれないのだ。音楽が音を「かたち」にしたものである以上、演奏された楽器から発せられた音が空気を震わせ、聴き手の身体に共鳴したものの、つまり、時間と空間を、演奏される瞬間、すなわち音楽が音を発して生まれる瞬間とともに共有することだけが、リアルな音楽体験と呼ぶべきものだ。

たとえば、最高級オーディオ機器を駆使した感動的な再現であっても、CDなどによって再生された音楽は、バーチャルな音楽体験に過ぎない。ただ、ゴカイ^Fのないようにいっておくが、それは、どちらがいいか悪いか、あるいは、どちらが優れているかという次元の問題ではない。たんに演奏する主体が演奏者という「リアル」な存在か、あるいは、CDなどのメディアという「バーチャル」な存在か、という違いだけだ。

ウ、この違いが、いかに途方もなく大きなものかを理解しておかないと、レコード出現後の音楽が、出現前の音楽の概念をも変えてしまったことにすら気づかないことになる。一九世紀と二〇世紀の音楽環境を隔てる決定的な溝は、じつはここににあるのだ。

一九三六年生まれのアメリカの作曲家、スティーヴ・ライヒは、「ぼくは最初にレコードで音楽を聴いて、そのあとでコンサート・ホールで聴いた最初の世代の作曲家だ」と語ったというが、このことばには、最初の音楽体験がバーチャルであったという驚愕とともに、西洋音楽の伝統に連なる（はずの）作曲家たちの、決定的な断絶をさえ感じる。

ビデオ・オペラの作曲でも知られる現代作曲家のロバート・アシユリーは、このようなことばを残している。「一〇〇人も人が、あるコンサート・ホールに座り、なぜそこにいるのか頭をひねる。『おい、まて。こんなことは一五〇年前にしたことだぜ。今じゃない』私にとっては、コンサートに行き、ある要求された時間そこに座り、そのあとコーヒーを飲みに行くなんてのはもう退屈だ」（若尾裕訳）。

コンサート・ホールで音楽を聴く、あるいは、バーやクラブで生演奏を聴くというリアルな音楽体験は、たしかに現代にも残されている。それが完全に失われてしまうことは、おそらくこれからもないだろう。だが、そこでの音楽体験は、ほとんどの聴衆にとっては、自分たちの（CDやiPodなどによる）バーチャルで日常的な音楽体験に対する、非日常的な音楽体験に過ぎない。

つまり、現代の大衆社会における多くの聴衆たちにとっては、リアルとバーチャルの音楽体験は、完全に逆転してしまっただ。

（浦久俊彦『138億年の音楽史』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ベツカク

- ① 写真を三倍にカクダイする
- ② 他人のジンカクを尊重する
- ③ 理科でチカク変動を学んだ
- ④ 高槻市はチユウカク市だ
- ⑤ 理科でデータをヒカクする

17

B トタン

- ① 東京にタンシン赴任する
- ② 墨のノウタンで絵を描く
- ③ 姉は折々にタンカを詠む
- ④ 木からモクタンを作った
- ⑤ 事件のホツタンは単純だ

18

C ギシ

- ① セイギの味方は不在です
- ② 葉にギタイするカマキリ
- ③ 優れたギコウを持つ職人
- ④ 祖父にチキユウギを贈る
- ⑤ 子供の頃のフシギな体験

19

D トクシユ

- ① 私の犬はザツシユです
- ② シユイロの厚紙を買う
- ③ シユシヨウな心がけだ
- ④ センシユを交代させる
- ⑤ 会議のシユシを伝える

20

E ゴカイ

- ① その考えは時代サクゴだ
- ② 迷子の子どもをホゴする
- ③ 今日のゴゴは友人に会う
- ④ カクゴを決めて向き合う
- ⑤ キゴを調べて俳句を詠む

21

問二 空欄

ア・イ・ウ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① 否定的な意味
- ④ 客観的な意味

- ② 絶望的な意味
- ⑤ 決定的な意味

- ③ 楽観的な意味

22

イ

- ① 戦争といわずして
- ④ 希望といわずして

- ② 革命といわずして
- ⑤ 宿願といわずして

- ③ 成功といわずして

23

ウ

- ① まるで
- ④ かるうじて

- ② あたかも
- ⑤ ただ

- ③ 断じて

24

問三 傍線 (a)・(b) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 「遠巻きに」

- ① 遠くから熱心に
- ③ 遠くまで見通して
- ⑤ 遠くまでくつきりと

- ② 遠くから望み見るように
- ④ 遠くからこっそりと

25

(b) 「頭をひねる」

- ① 考えが浮かばず深く悩む
- ② 物事に感心させられる
- ③ やれやれと落胆する
- ④ いろいろと考えこむ
- ⑤ ある考えが思いつく

26

問四 傍線部(一)「大衆社会」に当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 有名な歌手の新曲を、人々がテレビやラジオを通じて聴く社会
- ② 多くの大学生が、同じ機種スマートフォンを持っている社会
- ③ 人々の身分が固定されていて、主従関係でつながっている社会
- ④ 毎朝、人々が都市の周辺から中央へと電車で運ばれていく社会

27

問五 傍線部(二)「音楽にとって、革命的といえるメディアが、録音メディアの発明である」とあるが、「録音メディア」がもたらした変化に当てはまらないものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 「録音メディア」は音による創作物に過ぎない音楽を、レコードなどの形をもつ物体へ変化させた。
- ② 「録音メディア」は音の伝わり方を、聴き手の身体により深い内部に共鳴させるものへ変化させた。
- ③ 「録音メディア」は音をリアルなコミュニケーションの道具から、バーチャルな道具へ変化させた。
- ④ 「録音メディア」は、演奏者がいなくても好きな場所で音楽を聴くことが出来る状態へ変化させた。

28

問六 傍線部(三)「メディア」としての音に当てはまるものはどれか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ① コンサート・ホールで聴く歌手の声
- ② ラジオから流れてくる新人歌手の歌
- ③ レコードやCDの中に記録された歌
- ④ オーディオ機器から聴こえてくる曲

問七 傍線部(四)「現代の大衆社会における多くの聴衆たちにとっては、リアルとバーチャルの音楽体験は、完全に逆転してしまっただ」とあるが、同じ状況にあるものはどれか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ① 普段は夫のピアノ演奏で音楽を楽しむが、ときどき古いレコードも楽しむ。
- ② 普段は静寂を好むため音楽は聴かないが、ときどき自宅でコンサートを聞く。
- ③ 普段はロックや演歌のCDを購入するが、ときどきクラシックCDも購入する。
- ④ 普段はレコードやCDで音楽を楽しむが、ときどき好きな歌手のライブにも行く。

問八 本文の内容と合致しないものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

31

- ① 音楽にはポップスや歌謡曲といった大衆音楽と、鑑賞して楽しむための芸術音楽がある。
- ② 現代では音楽といえばCDやレコードなど、「記録された音」を指すと考えられがちである。
- ③ 一九世紀と二〇世紀の音楽体験を決定的に変化させたのは「録音メディア」の発明である。
- ④ 現代では演奏者による音楽を聴くというリアルな音楽体験は非日常的な体験となっている。